

# 光明

こうみょう

夏

第223号

〈特集1〉  
超宗派の  
僧侶が語る

# 食

〈特集2〉

## お盆、わかりません

ますだあけみの知好楽

『般若心経』やわらか手引き

まかはんにや～

しんごんしゅうぶざんは  
真言宗豊山派

# 光明

目次  
第223号 夏

- 03 | 特集1  
超宗派の僧侶が語る“食”
- 11 | 『般若心経』やわらか手引き  
まかはんにゃ～③
- 13 | 弘法大師の言葉⑫ 最終回  
堀内規之
- 15 | ますだあけみの 知好楽



- 17 | 特集2  
お盆、わかりません
- 21 | 仏教はじめてヒストリー⑧
- 23 | 仏教童話⑬⑭  
スタナと夜叉
- 31 | ヘルシーうれしい 精進料理⑳
- 33 | 作品募集 仏さまを描いてみよう!
- 36 | こうみょうパズル
- 39 | 弘法大師御生誕1250年  
総本山長谷寺記念参拝のご案内

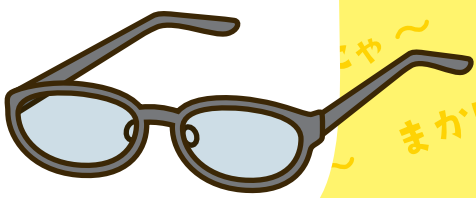


令和5年は弘法大師御生誕1250年です

3

# 「空は色に異ならず、色は空に異ならず」というものだから

舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受・想・行・識も亦復是の如し。



舍利子はお釈迦さまの弟子シャリープトラ(舍利弗)のこと。『般若心経』では聞き役で登場します。

そして、仏教語の「色」はカラーの意味ではなく、物、物体、形があるものという意味。あなたの体も、『光明』のページをめくるあなたの指も、どれも物ですから「色」です。

また、空は集まるさまざまな条件縁(よ)によって結果が変化してしまうので不変の実体はないという法則のことです。

今回の「色は空に異ならず(色不異空)」は、物体を良く観察すれば、すべては変化してしまい、条件が仮に集まっている(空という法則そのものの現れだから、物体は空と異なることがないという意味になります。

次の「空は色に異ならず(空不異色)」は、すべては変化してしまい、条件が仮に集まっている(空という法則によって物は存在しているという意味です。

お読みいただいている『光明』は冊子ですが、

原材料の木材からインク、製本、取材、編集、完成品の輸送、配布など膨大な縁の集合体として、今あなたの手の中にあります。読んでいただくために作られました。人によっては鍋敷きにしたり、時によっては夫婦ゲンカで武器として投げつけたりする人もいます。

このように、物は「これはこういふもの」という固定された実体はないのです。

色と空の関係について説いた後は、私たちが感じることも思ふことも空という法則から逃れることはないと言います(受想行識亦復如是)。

受(じゆ)耳や舌などの感覚器官(くわん)の一つの目は、まぶたや角膜、涙などの集合体です。物を見るだけではなく、口ほどにものを言う目もあります。それらの感覚器官の能力も加齢によっても変化するので空という方をしていきます。

想・行・識は、脳が外からの情報に対して行う一連の作業で、「これもまた、色と空の関係のよう

に、集まった条件によって、仮に今の状態になっている」と説いていきます。

目の前に置いてあるメガネを探すこともあります。見えているのですが、脳がそれを認識していません。私たちの判断も、次々に増える経験や知識によって変化していきます。

どうして、こんな面倒なことを説くかというと、私たちは、見るもの、聞く音などから判断していることを「これはいつでも、だれでも同じはず」と考えてしまい、その結果、心を乱すことが多いからです。

空という見方を通して、「これはこういふものだ」という思い込みを少なくしていくことで、心はおだやかになっていきます。

次回は、私たちが一喜一憂する「生滅」「垢浄」「増減」などに振りまわされないために説かれた部分をご紹介します。お楽しみに。

# 自心を知るは、すなわち仏心を知るなり。 仏心を知るは、すなわち衆生の心を知るなり。

『性霊集』(勸縁疏)

冒頭の文章は、弘法大師が師である恵果和尚から告げられたと述べられていたものです。そして、大師はこの文章に続けて、「三心平等なりと知るはすなわち大覚と名づく」と述べられています。自らの心を知ることということは、仏さまの心を知ることであり、仏さまの心を知ることとは、他者の心を知ることである。そして、この自心・仏心・衆生心の三つの心が平等と知ることが、覚りを得た者(大覚)であるということです。簡単にいえば、自分と仏と他者が平等であると認識すると

いうことになります。このことを、恵果和尚は門人に語っていたということです。

今年、沖縄が本土復帰して五十年を迎える年です。沖縄を訪れて、あの青い空ときれいな海、そして独自の文化と伝統に魅了された方々も多いかと思えます。その沖縄の言葉(ウチナーグチ)に、「肝苦りさ」というものがあります。「ちむぐりさ」と発音します。われわれが使う「かわいそう」とか「気の毒」といった意味合いとは、異なるニュアンスがある言葉です。他者が痛みを抱えている

とき、その痛みを自分も感じている、あなたの痛みや苦しみが、自分のこととして、私の胸をしめつける、そんな感じの言葉だそうです。これに比べると、われわれが普段使う「かわいそう」というのは、ある種の安全地帯にいて、他人事として、同情から発する言葉なのかもしれません。沖縄の「ちむぐりさ」は、決して他人事ではなく、その悲しみ、つらさを我が事として、あなたが泣くならば、私も共に泣きますという、真に他者に向き合っている言葉ともいえましよう。

私は、平等とはまさにこの事だと思えます。同情ではなく、相手に真に寄り添うこと、それが平等の一つの大きな柱ではないでしょうか。「ちむぐりさ」の真意をそのように考えると、豊山派の宗紋「輪違い」もまた別の解釈がみえてきます。豊山派で

は、二つの円の一方が私たち、他方が仏さまと解釈されています。これを、冒頭の大師の言葉と「ちむぐりさ」に基づいて解釈すると、



豊山派 宗紋「輪違い」

一方の円が私、他方の円が自分以外の他者、そして重なる部分が、仏心とみることが出来ます。人には様々な違いがあります。その違いをことさらに強調するのではなく、自分にも、他者にもある仏心に注目していけば、同じ仏心をもつ人という平等の心が生じ、その平等の心から、他者への尊敬や慈愛がさらに生まれにくると思えます。

コロナ禍というだけではなく、SNSでの他者への誹謗中傷が問題となっていていまだからこそ、恵果和尚から大師に受け継がれた、この教え「自心〓仏心〓衆生心」の思いを実践する時です。弘法大師が願われた多くの人々の幸福(蒼生の福)が増すように、真に他者に寄り添う「ちむぐりさ」の心をもって、前に向かつて共に歩んでいくことがいま強く求められています。



# 「喪服」

— 伊藤博文 —



喪服は黒ではなかった。

初代総理大臣の伊藤博文は、ハルビン駅（現在の中国黒竜江省で暗殺され、その一生を終えました。明治42年10月26日のことです。11月4日、日比谷公園で営まれた国葬には、30万人もの人々が参列しました。

このとき、式場の正門で行われたのは、参列者の服装の確認です。じつは、弔問客の衣装は燕尾服、と厳重に決められていました。黒の洋装に限られたのは、当時の欧米諸国の例にならったもの、と思われます。

いま、喪服といえば、黒の礼服が一般的です。それが普及するきっかけは、伊藤博文の国葬でした。和服から洋服へ、そして、喪服の色も黒へと統一されてい

く契機となったのです。

古い時代、喪服は素服と呼ばれており、素に「白い」という意味があることから明らかによろしく、その色は白でした。亡き人を弔い、悲しみの中にあることを表す喪服は、故人と親しい人が、喪に服す一定の期間、着用したものです。亡者の死装束と同じ色、すなわち白い衣服を身につけるのは、むかしから続く伝統でした。

伊藤博文の国葬を伝える新聞は、「黒羽二重の喪服を着た未亡人」と報じています。一方、同じ年に亡くなった二葉亭四迷の記事には、「婦人と長女せつ子さんは白無垢の姿」とあります。明治

45年に世を去った石川啄木の場合、「白衣の未亡人」と記されており、大正5年に逝去した夏目漱石の記事にも「四人の令嬢、白無垢にて」とあります。

喪服が、白から黒にかわるのは、明治の終わりごろで、東京をはじめとする大都市から始まりました。とはいえ、先の新聞記事からも明らかのように、しばらくは、白と黒の喪服が混在したようです。黒の礼服が定着し、遺族も参列者も着用するようになるのは、告別式が全国的に浸透する高度経済成長期を迎えてからでした。

わが国では、白を、とりわけ神聖な色として尊重します。その

白い服をまとうことで、身も心も、ともに清らかであることを表すのです。

赤ちゃんの産着も、やはり白です。喜びとともに迎える命。悲しみとともに送り出す命。どちらも、一点の汚れもない清らかな命だからなのでしょう。